

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士学位申請論文概要

論 文 題 目

日本語学習者における音韻習得に関する研究
—中国語方言話者のナ行音・ラ行音聴取を事例として—

申 請 者

大久保 雅子

2013 年 9 月

本研究は、中国語方言話者のナ行音・ラ行音の聴取混同に焦点を当て、第二言語習得における日本語聴取の問題を明らかにし、その指導および聴取練習の重要性を主張するものである。また、日本語教育における音声教育の在り方を検討し、提言を試みる。以下に各章の概要を述べる。

第1章 日本語教育における音韻習得

第1章では、日本語学習者の音韻習得上の問題点を指摘し、音韻習得の重要性を主張する。

第二言語習得において、音声・音韻は母語の影響が顕著に現れる分野と言われている。そのため、学習者の母語と日本語における音韻構造の相違によって、学習者にとって習得が困難な音韻がある。山本(2009)は、第二言語の破裂音習得と聴解力との関係を調査し、母語に有声・無声破裂音の弁別を持たない中国語北方方言話者は日本語の破裂音の習得が困難であり、有声・無声破裂音の弁別を持つ学習者よりも音声言語理解が劣ることを指摘した。この指摘から、特定の音韻が習得されていないことが聴解の分野に大きく影響することがわかる。聴解における情報処理過程は、ボトムアップ処理とトップダウン処理があり、この二つの処理を組み合わせることによって理解を進めている。音韻の認知はボトムアップ処理において必要なプロセスであり、トップダウン処理能力育成と併せて、ボトムアップ処理における音韻を認知する力も育成していかなければならない。

音韻上の問題点は、聴解だけでなく語彙の習得や作文など、様々な場面においても影響を与えることがわかっている。戸田(2011)は、「音声は話しことばにおけるコミュニケーションの基盤となるものであり、口頭表現、聴解、文章表現、漢字、語彙、文法、談話、待遇表現など、日本語教育の諸領域と関わっている」と指摘している。実際に、誤聴した音のままでことばを覚えてしまったり、作文などで書き間違えたりすることがしばしば起きている。

日本語教育における音声指導の扱われ方は、言語教育における外国語教授法のパラダイムシフトに合わせて変化していった。1960年以降のオーディオリンガル・アプローチから、1980年以降のコミュニケーションや意味理解中心のコミュニカティブ・アプローチ(以下CA)へとシフトしていった。その後、Long(1991)でFocus on Formが提唱され、コミュニケーションや意味理解を中心にしながら言語形式の習得を促すことの重要性が指摘さ

れるようになった。しかし、教育現場では「伝わればいい」という教育観を持つことがあり、このような教育観に影響を与えている要因の一つにC Aが挙げられるであろう。その場合、音声指導が軽んじられる可能性がある。

本研究では、学習者の音韻習得を支援するため、習得が困難な音韻を取り上げ、多角的に調査・分析を行うことによって問題点を明らかにする。その上で、音韻習得を促すための聴取指導および聴取練習の方法を提示する。

第2章 中国語方言における/n/と/l/

本研究で取り上げるナ行音とラ行音の混同は、中国語話者全てではなく、特定の方言話者にみられるとされる。しかし、それがどの方言話者なのかが曖昧で、一般的に中国南方方言話者という大まかな括りにされることが多い。ナ行音とラ行音の混同がある方言として広く知られているのが広東語であるが、実際には広東語以外の方言においてもこの混同がみられており、中国南方方言がどの方言を指すのかはわかっていない。さらに、福建省や台湾で使用されている閩南方言においてはナ行音・ラ行音・ダ行音の混同があると言われている。

ナ行音とラ行音の混同は母方言の音韻体系に関係しており、母方言において/n/と/l/の弁別がないことが原因であると考えられている。また、中国の様々な地域で/n/と/l/の弁別がないことが指摘されている。しかし、それぞれの地域で/n/があり/l/がないのか、またはその逆なのかという/n/と/l/の音韻体系の実態は明らかではない。

ナ行音・ラ行音の聴取混同の問題点を明らかにするためには、母方言の音韻体系における/n/と/l/の有無を明らかにする必要がある。そこで第2章では、中国語方言の音韻体系における/n/と/l/に関する先行研究を概観し、中国語方言の音韻体系を検討した。その結果、中国を東西に流れる長江から南側一帯、さらには長江沿いの北部の地域においても、/n/と/l/が混同しているということが確認できた。したがって、一般的に言われている中国南方と呼ばれる地域は、かなり広範囲に及ぶことになる。また、その地域の中には複数の方言が存在しており、それらの方言の/n/と/l/は、様々な特徴を持っていた。以上のことから、学習者の母方言によって、ナ行音とラ行音の混同傾向も異なってくることが予測される。したがって、ナ行音とラ行音の混同は、方言差を十分に考慮することが必要なのである。

第3章 ナ行音・ラ行音の聴取混同傾向

第3章では、聴取混同傾向および誤聴が現れやすい音環境を明らかにするために実施した「ナ行音・ラ行音聴取調査」の調査・分析結果を報告する。本調査の協力者は以下の合計189名である。

広東省広州のA大学で日本語を専攻している2年生、3年生 66名

四川省成都のB大学で日本語を専攻している3年生 53名

台湾のC大学で日本語授業を履修している日本語学習歴2、3年の学習者 70名

本調査結果から、各方言における聴取混同傾向が明らかになり、広東語話者と四川方言話者、広東語話者と台湾方言話者との相違点や共通点があることがわかった。広東語話者と四川方言話者との相違点と共通点は以下のとおりである。

相違点

- ①広東語話者において、ナ行音とラ行音は同程度の聴取混同がみられるが、四川方言話者においては、ラ行音よりもナ行音の聴取混同のほうが大きい。
- ②広東語話者において、ナ行音とラ行音の聴取混同よりもダ行音の聴取混同のほうが大きい。四川方言話者においては、ダ行音の混同はほとんどみられない。

共通点

- ①ナ行音・ラ行音の聴取混同は、語頭よりも語中の混同のほうが大きい。
- ②語頭にあるナ行音・ラ行音の混同には音環境の影響はなく、語中にあるナ行音・ラ行音混同は音環境の影響がある。ナ行音は短母音（例：アナ）の混同が大きい。語中ラ行音は撥音（例：アンラ）が混同が大きい。

相違点②の広東語話者におけるダ行音の聴取混同は、管見の及ぶ限り、先行研究では指摘されておらず、本研究で初めて明らかになった点である。このダ行音の聴取混同は日本語教育において台湾方言話者の問題点として扱われてきた。しかし、本研究によって、台湾方言話者だけでなく広東語話者においてもダ行音の聴取混同があるということが示された。

また、台湾方言話者のナ行音・ラ行音・ダ行音の聴取混同傾向において、以下の4点が明らかになった。

- ①ナ行音とラ行音の聴取混同は小さく、ダ行音の聴取混同が非常に大きい。
- ②ダ行音は、特に後続母音が /e/（デ）のときに聴取混同が現れやすい。
- ③ダ行音はナ行音よりもラ行音に誤聴しやすい。しかし、撥音が先行する音環境の場合

はラ行音だけでなくナ行音への誤聴も大きい（例：アンダ⇒アンナ）。

④ラ行音の混同は全体的に少ないが、撥音（例：アンラ）のときに混同がみられる。

台湾方言話者において、ナ行音・ラ行音・ダ行音の混同が広く認識されているが、聴取混同の実態は、圧倒的にダ行音の混同であった。また、本調査結果において広東語話者のダ行音の誤聴傾向においても②と③が示されており、台湾方言話者と広東語話者のダ行音の誤聴傾向には共通点があることがわかった。

第4章 ラ行音のバリエーションが聴取に与える影響の有無

第4章では、ラ行音のバリエーションが聴取に与える影響をみるため、「単音 /n/, /l/, /r/ 聴取調査」を実施した。本調査結果から、ナ行音・ラ行音の聴取混同にラ行音のバリエーションが与える影響はほとんどないことが示された。

日本語のラ行音は弾き音として一括りにされることが多いが、「語頭と撥音の後は [l] で、語中を [r] で生成されやすい」というラ行音のバリエーションがある。これは、語頭と撥音の後を弾き音で生成するのは自然な発音において難しいという調音上の特性である。しかし、本調査結果から、この調音上の特性であるラ行音のバリエーションによる誤聴は少ないことが明らかになった。さらに、第3章の「ナ行音・ラ行音聴取調査」の調査語の音声を音響解析し、生成されたラ行音が [l] と [r] で聴取混同に違いがあるかどうか検討したところ、違いは認められなかった。このことから、ラ行音のバリエーションが与える聴取混同への影響はほとんどないことがわかる。

また、Flege (1995) の Speech Learning Model (SLM) に「第一言語と第二言語の音声が聴覚的に異なるほど、その違いに気づきやすい」という仮説がある。この仮説から、母方言で [l] と [n] を混同していることが日本語の聴取にも影響を与えているならば、日本語でも [l] で生成された音を [n] に混同しやすく、[r] は母方言にない音であるため聴取しやすいことが予測される。しかし、実際はそうではないことが本調査結果で示された。このことから、[l] と [r] を聞き分けておらず、どちらもラ行音として認識できていると考えられる。

以上のことから、中国語方言話者のナ行音・ラ行音の聴取において、ラ行音のバリエーションが聴取混同に影響しているわけではなく、また、母方言の影響により [l] のときにいつも混同が現れるということではないことが示された。一方、第3章では音環境の影響が明らかになっていることから、ナ行音・ラ行音の聴取混同はラ行音のバリエーションよりも音環境の影響が大きいと考えられる。

第5章 ナ行音・ラ行音の聴取混同と外国語/n//l/の習得との関係

第5章は、ナ行音・ラ行音の聴取混同における外国語習得の影響を検討するものである。本調査結果から、広東語話者および四川方言話者においてナ行音・ラ行音のみならず英語/n/と/l/、中国標準語/n/と/l/も聴取混同がみられることが明らかになった。一方、台湾方言話者においては第3章の「ナ行音・ラ行音聴取調査」でナ行音とラ行音の聴取混同はあまりないことがわかっているが、本調査結果からも、ナ行音・ラ行音と同様、英語/n/と/l/、中国標準語/n/と/l/も聴取混同はほとんどみられないことが示された。

また、本調査の分析結果から、広東語話者と四川方言話者において、日本語のナ行音・ラ行音と英語/n/,/l/、中国標準語/n/,/l/の聴取混同には相関関係がみられた。したがって、一つの言語で/n/と/l/の聴取混同がある場合、その他の言語においても/n/と/l/を混同しやすく、反対に一つの言語で/n/と/l/を聴取混同しなければ、その他の言語においても/n/と/l/は混同しないことが明らかになった。

第6章 聴取混同における個人要因の影響

第6章は、ナ行音・ラ行音の聴取混同における個人要因を探るものである。実施したアンケートは、発音・聞き取りに関するアンケート調査Ⅰ、家庭使用言語・外国語学習経験・外国滞在の有無などに関するアンケート調査Ⅱ、音声学習ストラテジーに関するアンケート調査Ⅲである。

アンケート調査Ⅰでは、どの方言話者においても、発音よりも聴取で難しい音があると認識している学習者が非常に多いことがわかった。特に台湾方言話者においては、発音で難しい音があると認識している学習者が31%であるのに対し、聴取においては93%と、その傾向が顕著であった。このことは、学習者が聴取の難しさを自己認識していることを意味している。この調査結果から、第1章でも指摘したとおり、音声指導は発音に特化されることが多いが、それだけでは不十分で聴取指導も積極的に行っていく必要があると言える。また、広東語話者および四川方言話者においてナ行音とラ行音の混同を自己認識している学習者が多いことが明らかになった。特に、聴取においてナ行音とラ行音の混同を自己認識していることが示された。学習者が自分で発音練習をしているかどうかの質問項目では、どの方言話者においても6割を超える学習者が普段から自分で発音練習をしていると回答した。その練習方法は、「音読」が多く、「CDやテープを聞いてリピート」と

いうように日本語音声を聞いてリピートしている学習者も多かった。しかし、自分が正しく発音できているかどうかを自己評価するためには、正しい聴取が必要である。したがって、いくら発音練習を行っても、その音を正しく聴取できなければ問題点を改善することはできないことになる。そのため、聴取練習を学習者に促していくことが必要であると考ええる。

アンケート調査Ⅱでは、小学校・中学校・高校・大学での中国標準語の使用頻度を調査した。中国において、日常的に/n/と/l/の弁別がある中国標準語のインプットがあり、中国標準語を普段から使用しているのであれば、聴取混同が少ないことが予測される。しかし、中国標準語の使用頻度がナ行音・ラ行音聴取混同に与える影響は認められなかった。この結果は、中国標準語の使用が増えても、/n/と/l/の意識化がなければ、この二つの音を習得できないままになっているということの意味する。

アンケート調査Ⅲでは、学習者が使用している学習者の音声学習ストラテジーを調査し、学習者が使用するストラテジーがもたらすナ行音・ラ行音聴取への影響を分析した。発音能力やアクセント習得には「自己モニター型」の有効性が確認されているが(小河原 1997)、本調査結果から、日本語音聴取における「自己モニター型」の有効性は認められなかった。また、本調査結果から、「母語と日本語で発音の類似点、相違点を比較する」の項目の同意度が他の項目よりも低く、学習者が母語と日本語との発音の類似点、相違点を比較していない可能性が示唆された。音声習得において第二言語の音声とそれに近い母語の音声との違いに気づく必要が指摘されている(Flege1981,1987a,1987b,1995)。したがって、新たな音韻カテゴリー構築のためには母方言と日本語の音を比較し、違いに気づかせる必要があると考えられる。

第7章 学習者の音韻習得過程および音韻カテゴリーの構築

第7章は、聴取指導に関する二つのケーススタディを取り上げ、学習者の音韻習得の過程を明らかにするものである。ケーススタディⅠでは、台湾出身の学習者A、B、武漢出身の学習者Cに対して聴取指導を行った。この指導により、学習者AとBはナ行音とラ行音の聴取混同が改善された。しかし、改善に要した指導回数はAとBで異なっており、学習者の混同の程度により必要とされる練習回数が異なっていた。このことから、教室活動のみで全ての学習者の聴取混同を改善させることは難しく、学習者が改善に必要な練習を教室外でも行えるようにならなければならないことが示唆された。

また、指導によって聞き分けができるようになっていった学習者AとBは、ミニマル・ペアを注意深く聞くことによって、混同していた音を新しい音として捉えることができるようになっていった。さらに、Bの気づきから、ラ行音・ダ行音の混同と、タ行音・ダ行音の混同との関連が浮き彫りとなり、日本語母語話者との音韻カテゴリーのずれが確認された。一方、練習中、何度も間違えていた学習者Cは、ミニマル・ペアを聞いても、近似した母方言の音として聞いてしまっていたことがわかり、この方法では改善しないことが示された。このことから、ただ聴取練習をすれば第二言語の新しい音韻カテゴリーが形成されるわけではなく、ターゲット音の違いをどのような気づきとともに聞き分けるかが音韻カテゴリー形成および構築に重要であることが示唆された。

ケーススタディⅡでは、湖南省出身の学習者Dと安徽省出身の学習者Eに対し、聴取指導を行った。その結果、ケーススタディⅠと同様、DとEは聴取練習によって混同が改善された。また、発音には問題がなく聴取のみが混同しているDと、発音も聴取も混同しているEとでは、ナ行音・ラ行音の聴取の際、それぞれ異なったストラテジーを使用しながら自己修正を行っていることが明らかになった。Dは意識すれば正しく発音することができるため、聴取した音と同じように自分で声に出して発音することによって、自分が生成した音と聴取した音をモニターし、自己調整を行っていた。Eは今まで聴取に使用していた知覚 cue（手がかり）が有効ではないことに気づき、新たな知覚 cue（手がかり）を発見、使用することによって、自己調整を行っていた。さらに興味深いことに、Eが今まで聴取に使用していた知覚 cue（手がかり）というのは鼻音量であることが示唆された。したがって、日本語母語話者のナ行音・ラ行音の音韻カテゴリーと中国語方言話者の音韻カテゴリーは異なっており、中国語方言話者はナ行音とラ行音が聞き分けられないというよりも、日本語母語話者とは別の基準で聞き分けていたことになる。このままの状態では日本語レベルが上がっても聴取混同は残ったままになってしまい、知覚 cue（手がかり）を修正しないかぎりいくら練習しても改善は見込めない。

二つのケーススタディから、問題に焦点を当てた練習、そしてミニマル・ペアの音を聞き比べることによってナ行音・ラ行音の音韻カテゴリーが形成されることが示唆された。その際に重要なことは、Flege（1981,1987a,1987b,1995）が指摘しているとおり、ターゲット音を母方言音とは別の“新しい音”として聞けるようになることである。そのためには、今まで使用していた知覚 cue を見直し、ターゲット音と母方言との違いに気づいていくことが必要となることが示された。

第8章 既存の教材にみられる聴取指導および聴取練習

第8章では、ナ行音・ラ行音の聴取混同がある地域でこの問題がどのように扱われているかを明らかにするため、本研究の調査地域（広州、成都、台湾）で市販されている教材を分析した。対象にした教材は、日本語発音教材16冊、英語発音教材20冊、中国語発音教材8冊、合計44冊である。

本調査結果から、日本語、英語、中国標準語における発音教材の多くが/n/,/l/に関する情報を取り上げていることが明らかになった。第5章では、ナ行音・ラ行音だけでなく英語、中国標準語の/n/,/l/にも聴取混同がみられているが、外国語発音教材からも、外国語学習において中国人における/n/,/l/の問題が存在していることがわかる。第6章では広東省および四川省の多くの日本語学習者がナ行音とラ行音の聴取混同を問題点として挙げていることがわかっているが、日本語だけでなく他の言語を学んだ際に/n/,/l/の問題に気づきやすい環境であることが学習者の意識化に繋がっていると考えられる。

次に、市販されている発音教材を使用することによって、/n/,/l/に対する意識化が可能であることが明らかになったが、二つの問題点も浮き彫りとなった。

- ①発音練習が中心で、聴取練習が取り上げられていない教材が多い。
- ②発音・聴取練習がある教材においても、僅かなミニマル・ペアしか取り上げられていないため、十分な練習ができない。また、取り上げられている練習は混同が現れやすい音環境が考慮されていない。

以上のことから、発音教材の練習だけでナ行音とラ行音の音韻カテゴリー構築を目指すのは難しいと言える。しかし、教師が教材の練習を取り上げてミニマル・ペアの音をじっくり聞きながら二つの音の違いが何かを考えるという練習方法を学習者に提示することは可能である。第7章で、ミニマル・ペアを聞き比べることで二つの音の違いに関する気づきが得られることがわかっているため、まずは教師が学習者に聴取混同に対する意識化を促し、自律学習の方法を提示し、その学習を支援していくことが有効であると考えられる。

第9章 中国の教育現場における教師の音声教育に対する意識

第9章では、中国の大学の現役日本語教師4名を対象にインタビュー調査を行い、現場の教師の音声教育に対する意識、中国における指導の有無や指導方法を明らかにした。

中国における教師は日本よりも発音に対する意識が高く、発音指導を積極的に行っている。しかし、音声指導の内容やその方法は教師に任されており、教師によって扱う指導項

目にばらつきがみられる。また、音声項目によってはどのように指導したらいいかわからないという問題点も浮き彫りとなっており、具体的な指導方法を現場の教師に提示していく必要があると考えられる。さらに、教育現場では聴取指導はほとんど行われていないことも明らかになった。第6章で発音よりも聴取のほうに問題があると自己認識している学習者が多いことが明らかになっているため、教育現場における聴取指導および学習者の聴取練習によって音韻習得を促していくことが重要である。

第10章 学習者の自律学習の可能性

第3章から第9章まで、ナ行音・ラ行音聴取混同に関する調査を行い、混同傾向と要因、習得過程を明らかにし、指導方法の検討を行った。本章では、2012年度科学研究費補助金(奨励研究)の助成を受けて開発した e-learning 教材『日本語音の聞き分け練習』(代表者:大久保雅子)の詳細と運用について記述する。本教材は、「自己診断テスト」「練習問題」「振り返り」の三つのパートで構成されており、学習者は自分の聴取混同および誤聴傾向を把握し、それらの傾向に合わせて問題を選択し、聴取練習を行うことによって気づきを得ることが可能となっている。この教材はインターネットで公開し、誰でも使用できるものである。

中国・武漢市の大学の日本語学習者に本教材を紹介し、2012年12月～1月に本教材を使用した学習者5名の振り返りの分析を行った。この分析結果から、本教材を使用した練習によって、聴取混同しやすい音が焦点化され、誤聴しやすい音環境が把握できるようになっていった。このような過程を経て、弁別が難しい音韻カテゴリーが形成され、習得が促されることが示された。その上で重要な点は、「練習の継続」と「練習毎の振り返り」である。さらに、教師や支援者からの「励まし」や「アドバイス」が、学習者の自律学習を促すことが示唆された。

第11章 日本語学習者の音韻習得に向けて

本章では、本研究で得られた成果をまとめ、学習者の音韻習得を促す指導方法・練習方法の一例を提示し、日本語音韻習得および聴取指導・聴取練習の重要性を主張した。

言語習得において音韻習得は必要不可欠であるが、音韻習得に関する研究はそれほど多くなく、指導法まで検討されているものは非常に数が少ない。そのため、教育現場においてどのように指導したらいいかわからないということに繋がり、音韻上の問題に気づいて

いても、指摘のみに留まったり、問題点をそのままにしてしまう場合がある。学習者の自己の問題を克服しようとする姿勢に教師は真摯に向き合うべきであろう。

本研究は、中国語方言話者における音韻習得の問題点の一つであるナ行音とラ行音の聴取混同を取り上げ、以下の点を大きな特色として研究を行い、日本語教育への貢献となる研究成果が得られた。

- ①中国語の方言差を考慮して問題点を明らかにした。今までの音韻習得研究では、中国語の方言差はあまり考慮されてこなかったが、中国語の方言は音声面で大きく異なっており、この方言差が外国語の音韻習得に大きな影響を与える。本研究で、方言差における共通点と相違点が明らかになった。
- ②個人要因・社会的要因を明らかにし、多角的に考察を行った。今までの音韻習得研究では、母語の影響のみに焦点が当てられることが多かったが、第二言語の音韻習得において母語の影響を明らかにすることだけでは不十分である。本研究では、習得に影響を与える個人要因・社会的要因が明らかになった。
- ③聴取混同傾向および音韻習得過程を明らかにし、問題改善のための具体的な指導方法を提示した。今までの音韻習得研究では、問題点の解明に重きが置かれており、具体的な指導方法の提示があまりなされてこなかった。教育現場において、問題点解明から導き出された実践可能な指導方法の提示が必要となる。本研究で、聴取指導の具体的な方法が明らかになった。

本研究から得られた知見を踏まえ、日本語教育現場における聴取指導の重要性および学習者の聴取練習の必要性を主張した。聴取指導によって学習者の音韻習得を促すことが可能となるため、教育現場における音声指導は発音だけでなく聴取の指導を行っていくことに意義があると考えられる。また、学習者が「学び方を学ぶ」ということが重要である。学習者が「学び方を学ぶ」ことによって自律学習が可能となり、主体的に音韻を獲得していくことができる。そのために、教師が学習者の「学び方を学ぶ」ことを支援していくことが、自律学習へと結び付いていくのである。

日本語教育における学習者の音韻習得のためには、教育的視点を持った音韻習得研究が必要であり、研究から得られた知見を構築し、教育現場に発信していくことが求められている。本研究では、ナ行音・ラ行音を一例として、教育現場で学習者の音韻習得を教師が促していく方法を提示した。また、e-learning教材を開発することによって、学習者の音韻習得に向けた自律学習支援を行った。本教材は現在も web 上で誰でも自由に使用するこ

とができる。様々な地域で学んでいる学習者の音韻習得を促すために、教育現場の日本語教師と連携し、学習者の自律学習を支援していくことを今後の課題とする。

引用文献

- 小河原義朗（1997）「発音矯正場面における学習者の発音と聞き取りの関係について」『日本語教育』92, pp.40-52.
- 戸田貴子（2011）「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』9, 59-65.
- 山本富美子（2009）『第二言語の音韻習得と音声言語理解に關与する言語的・社会的要因』ひつじ書房
- Flege, E. James (1981) The phonological basis of foreign accent: a hypothesis, *ESOL Quarterly*15/4,443-455.
- (1987a) The production of “new” and “similar” phones in a foreign language: Evidence for the effect of equivalence classification. *Journal of Phonetics* 15, 47-65.
- (1987b) Effects of equivalence classification on the production of foreign language speech sounds. In A. James & J. Leather (Eds.), *Sound Patterns in Second Language Acquisition* (9-39). Dordrecht, The Netherlands: Foris.
- (1995) Second-language speech learning: Theory, findings, and problems. In W. Strange (Ed.), *Speech Perception and Linguistic Experience*,233-277.
- Long, M.1991. Focus on form: A design feature in language teaching methodology. In K. de Bot, R. B. Ginsberg, & C. Kramsch (Eds.), *Foreign Language Research in Cross-cultural Perspective* , 39-52.